

2022年2月20日（日）／説教者：國分美生

説教：「神を愛し、人を愛し、命を愛す」

聖書：出エジプト記1：15～21

国中にイスラエル人の数が増えたことで、エジプト王は恐れを抱きました。それはイスラエルの民が権力に服従しない「まつろわぬ民」だったからでしょう。それはイスラエルの人々が何か抵抗運動を行った、というのではなく、信仰の問題でした。エジプトの神を拝まないイスラエルの人々を、エジプトの人々は自分たちに迎合しない者たちとして危険視しました。権力者は、自分を恐れず、自分に従わない者に恐怖を抱くという普遍的な事実がここに描かれています。イスラエルの人々は強制労働を課され、虐待されました。単なる「いじめ」でなく、気力・体力を奪うことで抵抗する力を奪ったり、疲労によって思考停止に陥ることを狙っていたのでしょう。

助産師シフラとプアも、エジプト人の自分たちに対する差別と憎悪のまなざしをひしひし感じながら生きていたでしょう。彼女たちはエジプト王に、産まれてくるイスラエル人の男児を殺せ、と命じられます。王は、権力者で、男で、力もある自分を恐れて、このか弱い女たちは言うとおりにするだろう、と考えていたかもしれません。ですが二人は、自分たちのイスラエルの神を恐れ敬っていたので、王の命令に背きました。それはどれほどの覚悟と命がけの行為であったか。イスラエルの神に従う者・シフラとプアは命は神が与えるもの、その命を人間である自分たちが奪うということはとてもできない、と考えました。たとえ力あるエジプト王でも、命を奪う権利は持たないと彼女たちは知っていました。神がイスラエルを愛し、生き延びることを望んでおられる、という神への信頼が、彼女たちの行動の動機だったでしょう。聖書では彼女たちのこの決断と行動のゆえに、イスラエルの民は数を増し、強くなったとされています。彼女たちの姿に、これまですさまじい人種差別や女性差別に対して抵抗し、命のために行動した先達たちの姿が重なって見えてきます。

私たちは力で押さえつけられ、暴力を目の当たりにし、怖くて、委縮することがあるでしょう。目の前に迫ってくる力の強い者が、自分の生殺与奪の権利を握っているかのように見える時があるでしょう。屈した方が楽になるのではないだろうかという誘惑もあります。ですが、決断も行動も、神を畏れ敬い、神の御心を尋ね求めるところから始まります。私たちの支配者、私たちの主はイエス・キリストです。イエス・キリストへの信頼は私たちを「神を愛し、人を愛し、命を愛す」生き方へと導きます。（國分美生）